

詩・小芸術・コミットメント

モリスの後期韻文作品をめぐって

川端康雄

Sigurd the Volsung を刊行したのと同年の 1876 年に William Morris は反戦運動に参入し、42 歳で初めて公の場で政治的発言をおこなった。本格的な韻文作品はこれが最後で、その後は既発表の短詩の拾遺である *Poems by the Way* (1891) を刊行しているものの、文学創作の重点は *The Wood beyond the World* (1894) や *The Well at the World's End* (1896) などのいわゆる“late prose romances”の執筆に移される。では後半生に政治活動に精力を傾けたモリスは詩を捨てたのだろうか。いや、そうではなく、むしろ詩人としての新たな展開を後期のモリスは果たした、という仮説を以下の 3 つの観点から検証した。

1. 小芸術と詩

Poems by the Way は、タイトルが示すように、折々に書かれ発表された詩を集成した詩集で 1891 年に The Kelmscott Press から、また普及版が同年に Reeves & Turner 社から刊行された。収録された 54 篇のうち、絵画作品あるいは装飾芸術作品に寄せて書かれた詩が 11 篇ふくまれる。そのなかの 1 篇 “The Woodpecker” (1885) は同名のモリス商会制作のタペストリーに寄せた短詩である。室内空間を飾る「小芸術」(lesser arts) の一品であるタペストリーの天と地にこの詩の全文 “I once a King and chief / Now am the tree-bark’s thief, / Ever ’twixt trunk and leaf / Chasing the prey” (CW 9:192) がモリス自身のレタリングで織り込まれている (Morris Gallery)。工程が非常に複雑で手間のかかる、近代では廃れていたタペストリー織をモリス商会が復興したのは 1883 年のことだった (モリスが社会主義者であることを宣言した年でもある)。この詩はオウィディウス『変身物語』中のピクス王の物語をふまえている。果樹とそこに停まるキツツキ、大胆にうねるアカンサスの模様、また左右の花の縁飾りの下絵を描いたデザイナーとしてのモリスと、そこに織り込む韻文を供給した詩人モリスがひとつのタペストリーのなかに併存している。室内装飾に組み込まれた詩をどう評価するか。工芸品に「従属」して文学作品としての「自律性」に欠けているとする向きもたしかにあるのだが、「装飾芸術としての詩」を詩人モリスの本領として積極的に捉えてみたい。そもそも出世作の *The Earthly Paradise* (1868-70) じたいがモリスの終生の友人にして協働者であった Edward Burne-Jones を介してモリス商会のさまざまな室内装飾品に翻案されたわけであり、その点で早期からモリスの詩と工芸は (集団) 創造的に交わっていた。壽岳文章が指摘したように、「工芸的な立場からモリスの詩を読みなおすと、感銘はまた別のものとなる」のであり、たしかにそれは「詩人モリスに近づく重要な参道の一つ」(141) なのである。

もっとも、タペストリーという工芸は、その複雑で手間のかかる工程ゆえにやむを得ないこととはいえ、モリス商会の製品のなかでもとりわけ高価で、富裕層にしか手が届かないものだった。バーン＝ジョーンズの連作絵画 “The Briar Rose” とそれに添えたモリスの詩 (“For the Briar Rose,” in *Poems by the Way*; CW 9:190) についてもそれは同様だった。Lowthian Bell の邸宅 Rounton Grange の内装を手がけていた際にモリスが激昂して “I spend my life in ministering to the swinish luxury of the rich” (qtd. in Thompson 274) と口走ってしまったという挿話に見られるように、社会主義者として世直しの運動に取り組み、民衆のための芸術を志向したモリスにとって、自身の詩も装飾デザインもすべての人びとと分かち合えないという現状は葛藤の種だった。次に述べる「コミットメントの詩」はその難点を超克する試みであった。

2. コミットメントの詩

Poems by the Way には政治・労働運動に関わる詩が 10 篇ふくまれる。モリスが創設メンバーだった社会主義同盟の機関紙 *The Commonweal* に連載した物語詩 *Pilgrims of Hope* (1885-86) からの抜粋、また *Chants for Socialist* (1885) からも収録されている。1876 年から「東方問題」に関わっていたモリスは関係者の求めに応じて反戦歌 “Wake, London Lads!” を作詞し、それが 1878 年 1 月に開かれた集会で 3 千人の参加者によって斉唱された。ひとつの目的 (ここでは反戦) に賛同した人びとが一同に会して運動歌を歌う、その集団的声の強烈な響きもつ独特な力をこの機会にモリスは認識したといえる。そして 1880 年代に入って、詩人としての彼の天分 (の一端) が社会主義集会で歌われる (あるいは口ずさまれる) 歌の作詞に注がれることになる。

Chants for Socialists はモリスが 1883 年から 85 年にかけて書いた運動歌を集めてパンフレットとしたもので、

社会主義同盟から価格 1 ペニーで出された。この詩集についても、前節の装飾芸術の詩と同様、従来の評価ではモリスの文学面での仕事としては副次的なものに見なされてきたが、モリス没後も長く労働者の集会や行進で歌われた詩であるという点でもっと注目されてよい。たとえば英文学者の佐藤清は 1917~19 年のロンドン留学中にロイヤル・アルバート・ホールでの「労働者大会」に出席した際に *Chants for Socialists* のなかの「勇壮な歌」が万人近い会衆によって歌われたことを伝え、それに強く心を揺さぶられたことを回想している(佐藤 2)。さらにスペイン内戦に英国から参加した青年を描いた Ken Loach 監督の映画 *Land and Freedom* (1995) のなかで、モリスの“The Day Is Coming”の詩句が引用される場面が出てくる。1930 年代でも運動の場でモリスの「コミットメントの詩」が引用される機会が多くあったことをローチはふまえている。

3. 「散文ロマンス」における詩

モリスは 1880 年代後半以降、詩作から「散文ロマンス」に重点を移したというのが従来の一般的な見取り図であるが、よくよく見ると必ずしもそうとは言えないところもあることに気づく。

まず、「散文ロマンス」と言いながら、ほとんどの作品で韻文(定型詩)が併用されている。*The House of the Wolfings* (1889) は語りの部分が散文で主人公らの台詞の部分が韻文というように使い分けられており、サブタイトルには “In Prose and in Verse” と明記されている。それ以後の物語は *Wolfings* ほどには韻文を多用せず、散文が主で韻文が副次的な使用となっていて、形式面から見るならたしかに「後期散文ロマンス」と総称されるのは誤りではない。モリスにおけるこのような文学形式の変化は、①政治活動の激務のため詩作に費やす余裕がなかった、②ケルムスコット・プレスでの見開き 2 頁の紙面構成を考慮して、韻文よりも散文形式を好んだ、という 2 説が考えられるが、①については、*Odyssey* の韻文訳を 1887 年に仕上げているので、必ずしも時間的制約で韻文を避けたとは言いきれない。また、韻文での創作の試みをモリスが持続していたことは、モリスの秘書の Sydney Cockerell が証言している (qtd. in *CW* 20: xvii)。

W. B. Yeats はモリスについて、“He may not have been, indeed he was not, among the very greatest of the poets, but he was among the greatest of those who prepare the last reconciliation when the Cross shall blossom with roses” (89) と評した。これは“The Happiest of the Poets”の結論部分である。最高の詩人ではなかったかもしれない、いや最高の詩人とは言えない、とは本シンポジウムで関良子氏が引用した Lafcadio Hearn の評価と重なる。それは否定的評価というのではなく、他の「一流詩人」にはない美点・特徴をモリスが備えていたことをイエイツはよく論じている。そして強調すべきこととして、このエッセイのなかでイエイツが称讃しその魅力を語るモリスの詩の世界には、いわゆる「後期散文ロマンス」が多くふくまれている。韻文作家・散文作家と区別するのではなく、物語作者モリスを詩人として(しかも「最高に幸福な」という形容辞を付して)把握するイエイツの見立ては妥当である。どこの時代であるのかわからない、しかし周囲に深い森があり、清冽な川が流れ、産業化の産物が皆無であるところ、どこか遠い昔の共同体が舞台となる世界のなかで、古風な語彙とイディオムを用いた特異な文体は、「散文」というよりもむしろ「自由詩」(伝統的な定型をもたぬ詩)と称してよい。英詩における“free verse”は、モリス没後、エドワード朝後期に出てきたものであるが、モリスの後期ロマンスの古風な言語は、逆接的にも、モダンな英詩のスタイルを先取りしているところもある。イエイツはそれを感知して上記のようなモリス論を展開したと見ることができる。

以上、まず小芸術・装飾芸術としての詩作において、つぎに政治的コミットメントにおける詩作において、そして最後に「後期散文ロマンス」と呼ばれてきた一連の物語群の創作において、モリスは詩人たることをやめず、「タペストリーの詩人」ならではの独特な詩的世界を築いていった、というのが本発表の結論になる。

参照文献

Morris, William. *Chants for Socialists*. London: Socialist League, 1885.

---. *The Collected Works of William Morris*. 24 vols. Ed. May Morris. London: Longmans, 1910-15. [*CW* と略記]

---. *Poems by the Way*. London: Reeves and Turner, 1891.

Loach, Ken, director. *Land and Freedom*. PolyGram Filmed Entertainment, 1995.

Morris Gallery, The William. “Woodpecker Tapestry (1885).” <<https://www.wmgallery.org.uk/collection/themes/highlights/object/woodpecker-tapestry-fl39-1885>>. (accessed 11 July 2019.)

Thompson, E. P. *William Morris: Romantic to Revolutionary*. 2nd ed. New York: Merlin, 1977.

Yeats, W. B. “The Happiest of the Poets.” *Ideas of Good and Evil*. London: A.H. Bullen, 1903. 70-89.

佐藤清「はしがき」モリス『藝術論』佐藤清訳、日進堂、1922年、1-2頁。

壽岳文章「ケルムスコット・プレス」『英米文学史講座 9 十九世紀III』研究社、1961年、141-156頁。